

「色を残す」植田正治カラー作品の保存と デジタルアーカイブ作成

研究代表者 芸術学部 写真学科 教授 田中 仁

共同研究者 助教 勝倉 峯太、助手 高島 圭史、北瀬 和世、植田 亨

植田正治

植田正治は 1913 年生まれの日本を代表する写真家であり、戦前から戦中、戦後にかけて活躍した。徹底的に自己表現の制作を行い、生涯において出身地鳥取県境港を中心とした山陰地区での撮影を主としていたことでは、日本において特異な存在である。海外での評価も高く、展覧会、収蔵も数多くされている。

2000 年に没してから毎年、写真展、写真集出版が続いているほど人気と知名度を誇る。また数少ない個人写真家の美術館として鳥取県伯耆町立植田正治写真美術館がある



植田正治生家（登録有形文化財）



植田正治写真美術館

未整理の写真作品

植田正治の代表的な作品は国内外の美術館などに収蔵されているが、その中心は植田正治写真美術館である。他に植田正治事務所が保管している作品もあるが、生家（鳥取県境港市）には未整理の作品が大量に残されている。本研究ではその残された作品のうち、変色退色が著しいカラー作品について保存とデジタルアーカイブを行うものである。

作品保存とアーカイブ

写真保存には二つの方法で望んでいる。一つは写真原版の実物保存であり、汚れやカビなどを除去し天然素材を主とした写真アーカイブ用品に移し替えてファイリングし、最終的に温度湿度の整った場（写真収蔵庫など）で保管する方法である。もう一つは複製（デジタル）による保存である。デジタル化にはスキャニングと撮影によるものがあるが、本研究では作品種類、サイズが多種にわたることと、効率を考えて撮影で行っている。1億画素の PhaseOne と 2300万画素の一眼レフカメラを併用している。



原版の保存（植田正治写真美術館にて）



撮影によるデジタルアーカイブ作成

研究現状

大量の作品保存を現在進行中であるが、代表作（パパとママとコドモたち 1949 年）のカラー試作が再発見されたり、元色の分からない退色や画像が消失したのもあり、調査上の発見が多く見られる。年代の特定なども含めて暫時、進行中である。



再発見された代表作のカラー試作（1950 年頃）



退色が激しいカラー作品（撮影年不詳）

調査研究とスキルの伝承

植田正治のカラー作品は約 50 年（1950 代～2000 年）にわたる。種類はカラーリバーサル、カラーネガ、カラープリント（各種）、インスタント（ポラロイド他）などですべてフィルムである。写真がデジタル化されて久しい現代では、フィルム（銀塩）を知り得ない世代が増えている。本研究では研究スキルの伝承のため若手教員/研究者、学生も参加している。

今後の課題

カラー写真の保存とアーカイブは意外ではあるが研究が進んでおらず、定まった手法と方向性は明確にはなっていない。退色している作品の補修など再現への異論もあり統一が図られていない。銀塩モノクロ写真の保存方が確立してきているのに比べるとまだ未成熟な分野である。本研究の結果が問われている。

また、デジタルアーカイブの活用とルールも考察していく必要がある。著作権や運用ルールの策定なども必要であり、データベースとしての方向性なども課題である。本研究は 2019 年 3 月までの 2 年計画で進めている。